

臨床実習に対する学生の意識について

井口 茂¹ 中村 律子² 尾崎 英明³

要 旨 臨床実習における目標・指導形態等を検討するため、学生の意識調査を行った。その結果、臨床実習の目標は、Ⅰ期は基本的な検査測定の実施、Ⅱ期は問題点の把握と理学療法計画の立案、Ⅲ期は患者との人間関係が最も多かった。指導内容は口頭指導、ケースレポート等の症例を中心とした直接的指導を求めている。学生評価については、ほとんどの学生が正当であると回答したが、治療態度にその比重があるものと感じていた。従って、学生の臨床実習に対する意識は、症例を中心とした指導形態・指導内容を求めているものの、臨床実習において「評価されている」という意識も混在し、指導者側へ期待と不安を訴えているものと考えられた。

長崎大医療技短大紀7: 115-119, 1993

Key words : 学生意識, 臨床実習, 臨床教育

1. はじめに

理学療法士養成教育における臨床実習の果たす意義は大きく、その目的は学内教育で得た知識・技術を実際の臨床場面で応用し、学生自身の言葉・技術として理学療法を経験し、理解することである。具体的には第1に、対象である患者が抱える身体的、精神的、家族、環境、職業等の様々な問題点に気づき、また学生自身で捉えること。第2に気づいた問題点に対する解決方法を知っているかどうか、また知らない点を認識すること。第3に上述した問題点の中で理学療法、リハビリテーション医療の展開（チームアプローチ等）の重要

性を知り、経験することであろう¹⁾。

このように臨床実習の意義は大きく、そこに携わる教官及び臨床実習指導者（Supervisor：以下、SVと略）の役割も大きい。しかし、臨床実習教育に関する議論は、教育機関とSV間の指導目標や学生の評価方法に関する事柄が多く、臨床実習の主体である学生の考えについては考慮されていない²⁾。

そこで今回、臨床実習終了後の学生に対して臨床実習に関する意識調査を実施し、その結果から臨床実習に関する指導目標、指導形態、指導内容について考察を加え報告する。

2. 対象と方法

1 長崎大学医療技術短期大学部理学療法学科

3 長崎労災病院リハビリテーション診療科

2 長崎リハビリテーション学院理学療法学科

対象は、平成5年度臨床実習を終了した長崎県内の理学療法士課程の3年生55名とした。臨床実習終了後にアンケートを実施し、直接記入にて回答してもらった。アンケートの内容は、①臨床実習の目標、②実習指導形態、③指導内容、④学生評価等に関する項目とした。

3. 結果

1) 臨床実習の目標について

表1に示すように、I期目の目標は「基本的な検査測定の実施」と「患者との人間関係」が14名(25.5%)と最も多かった。II期目では、「問題点の把握と理学療法計画の立案」が16名(29.1%)と最も多く、「患者との人間関係」が14名(25.5%)と続いていた。III期目でも、「患者との人間関係」が17名(31.0%)と最も多く、「問題点の把握と理学療法計画の立案」10名(18.2%)であった。臨床

実習の全体的目標では、「患者との人間関係」14名(25.5%)と多く、次いで「態度、医療人としての自覚」13名(23.7%)であった。

また、臨床実習の到達目標については、53名(96.4%)のほとんどの学生が「基本的理学療法が行えるレベル」と回答していた(表2)。

3) 臨床実習の指導形態について

学生が臨床実習で実際に適切であったと考える指導形態は、口頭指導19名(34.6%)と最も多く、次いでケースレポート12名(21.8%)、デモンストレーション10名(18.2%)、症例検討会8名(14.5%)の順であった。また、学生が必要と考える指導形態は、口頭指導21名(38.2%)、症例検討会13名(23.6%)、ケースレポート12名(21.8%)の順に多かった(図1)。

4) 臨床実習の指導内容について

実習で学生が指摘された指導内容は、知識

表1 臨床実習の目標

項目	I期目 人数(%)	II期目 人数(%)	III期目 人数(%)	全体的目標 人数(%)
1. 疾患の理解、情報収集	3 (5.5%)	7 (12.7%)	2 (3.6%)	4 (7.3%)
2. 基本的な検査測定の実施	14 (25.5%)	5 (9.1%)	2 (3.6%)	4 (7.3%)
3. 問題点の把握と理学療法計画の立案	4 (7.3%)	16 (29.1%)	10 (18.2%)	9 (16.3%)
4. 基本的な治療の実施	1 (1.8%)	2 (3.6%)	8 (14.5%)	2 (3.6%)
5. 疾患におけるリスク管理	2 (3.6%)	2 (3.6%)	2 (3.6%)	2 (3.6%)
6. 学内教育の応用と統合	2 (3.6%)	3 (5.5%)	4 (7.3%)	4 (7.3%)
7. 患者との人間関係	14 (25.5%)	14 (25.5%)	17 (31.0%)	14 (25.5%)
8. 職員との人間関係	2 (3.6%)	1 (1.8%)	3 (5.5%)	1 (1.8%)
9. 態度、医療人としての自覚	9 (16.3%)	5 (9.1%)	5 (9.1%)	13 (23.7%)
10. リハビリテーション、理学療法の位置づけ	4 (7.3%)	0 (0%)	2 (3.6%)	2 (3.6%)
合計	55 (100%)	55 (100%)	55 (100%)	55 (100%)

表2 臨床実習の到達目標

項目	人数(%)
1. 終了時に一人前の理学療法が行えるレベル	2 (3.6%)
2. 基本的理学療法が行えるレベル	53 (96.4%)
合計	55 (100%)

臨床実習に対する学生の意識

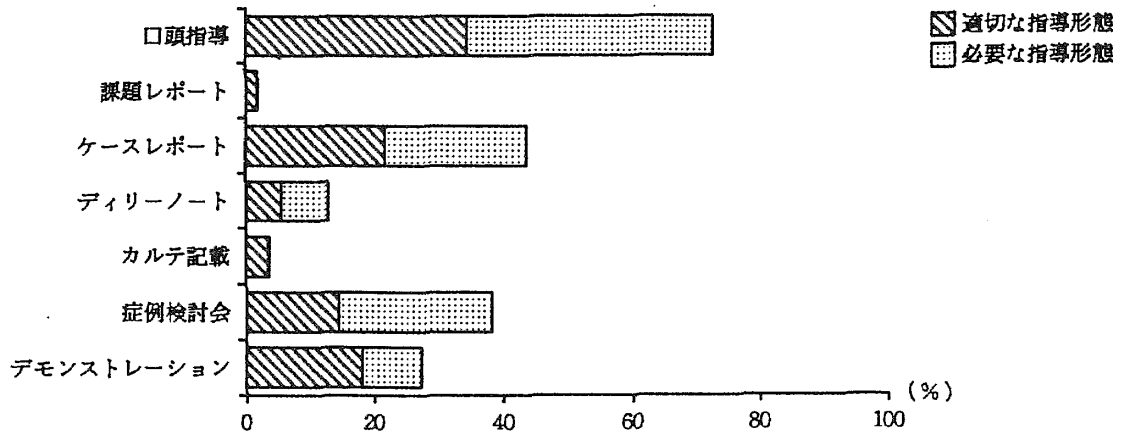


図1 指導形態の内訳

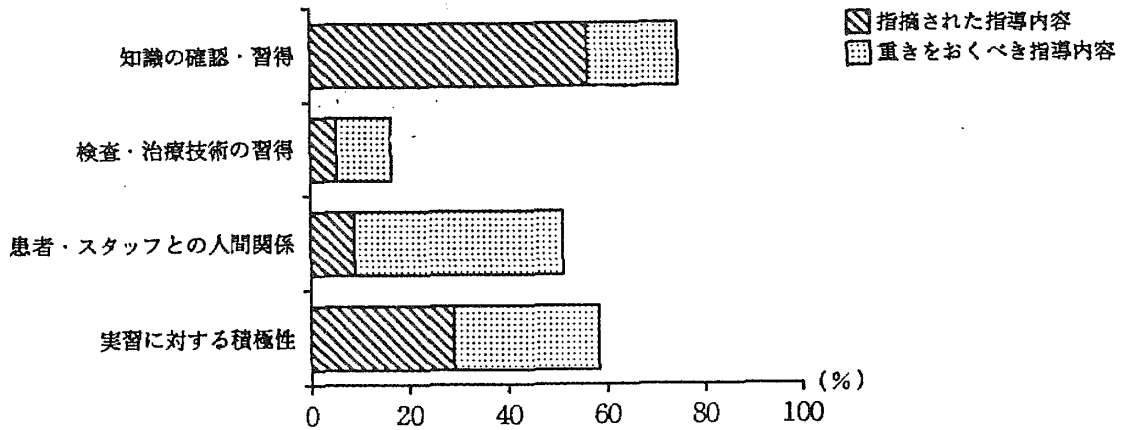


図2 指導内容の内訳

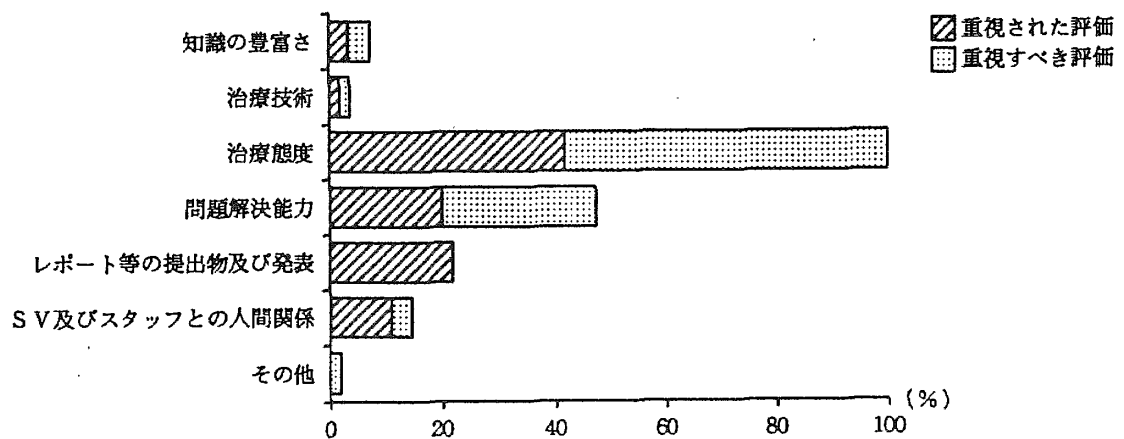


図3 評価内容の内訳

の不足31名 (56.3%) と最も多く、次いで実習に対する積極性16名 (29.1%) と多かった。また、検査・治療技術の不足は、3名 (5.5%) と少なかった。また、学生が重点を置く

べきと考える指導内容は、患者・スタッフとの人間関係23名 (41.8%)、次いで実習に対する積極性16名 (29.1%)、知識の確認・習得10名 (18.2%) であった (図2)。

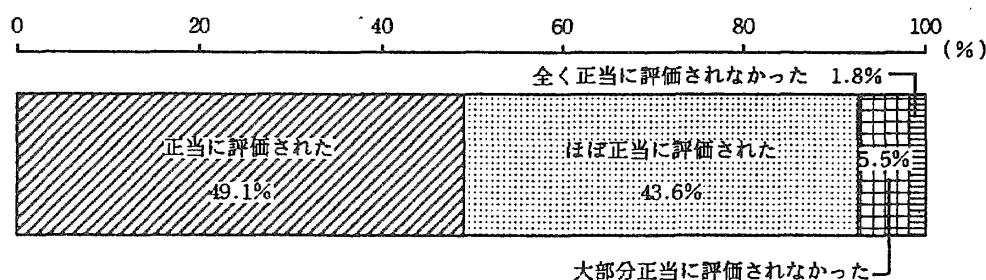


図4 学生評価の正当性

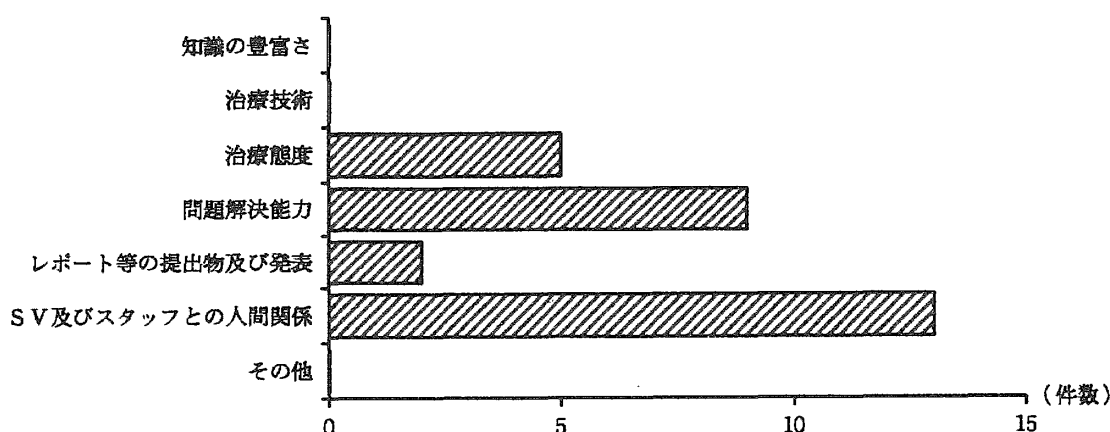


図5 正当に評価されなかった項目

5) 臨床実習における学生評価について

臨床実習の評価において学生が重視されたと考える内容は、治療態度23名(41.9%)と最も多く、次いでレポート等の提出物・発表12名(21.8%)、問題解決能力11名(20.0%)であった。また、学生が重視すべきと考える評価内容は、治療態度34名(61.9%)、問題解決能力15名(27.3%)であった(図3)。

評価に対する正当性については、ほぼ正当に評価されたを含めると51名(92.7%)の学生が評価に対して正当であると回答していた(図4)。そのうち正当に評価されなかったと回答した者は4名(7.3%)で、その項目は、SV及びスタッフとの人間関係13件(44.8%)と多く、次いで問題解決能力9件(31.0%)等であった(図5)。

4. 考 察

今回、臨床実習終了後の学生に対して、臨床実習に関する意識調査を実施し、学生の立

場から実習の目標、指導形態、指導内容、学生評価について考察する。

臨床実習の目標については、Ⅰ期目では「基本的な検査測定の実施」、Ⅱ期目では「問題点の把握と理学療法計画の立案」、Ⅲ期目では「患者との人間関係の構築」が最も多く挙げられていた。これは、学内での臨床実習の目標と一致する結果と思われる。さらに全体的目標を含め各期とも、「患者との人間関係」が上位に占めていたことは、臨床で患者と接することの重要性が伺われる。また、全体的目標において「態度、医療人としての自覚」が上位に占められていたことは、卒業後の患者に対する責任の認識を示しているものと思われる。しかし、臨床実習の到達目標では「基本的理学療法が行えるレベル」であると捉えており、このことは理学療法士養成教育の社会的変化(養成校教育・短大教育・四年制教育等)に伴う指導者側との考えとも一致している。

従って、学生の意識の中に臨床実習の目的は、卒後の専門職としての力量の獲得と、学校教育の中の臨床実習の目的とが混在した形で存在しているものと考え、指導する教官、臨床実習指導者における学生の到達目標は、上述した理学療法士養成教育の変遷の中で「実践家の養成」から「理学療法における生涯教育の一貫」へと変化しつつある。しかし実際、卒業後の社会的立場から臨床教育での目標は、「実践家養成」の比重が大きいものと考えられ、臨床教育における指導者側の明確な捉え方の必要性が迫られているように思われる。

次に指導形態については、実習で適切であった指導形態、必要と思う指導形態とも、口頭指導、症例検討会が多く、課題レポート等は少なかった。学生が指導において求めているものは、指導者の直接的指導とともに、学生の患者に対するアプローチへの指導であるものと考え、

指導内容については、実習で指摘された内容は「知識不足」であり、学生が考える重視すべき指導内容は「実習態度（SV・患者）」であった。指導形態の結果と同様、学生が求めるものは、患者へのアプローチの実践内容であるが、学生自身の知識・技術不足に関する認識は低く、臨床実習における学生の目的

意識の曖昧さ、また指導の在り方が問われるものと考え、

学生評価における学生自身の意識としては、多くが評価に対して正当であると感じているが、評価されなかった項目としては指導者との人間関係を挙げたものが多かった。また、重視された評価、重視すべき評価としてともに治療態度を挙げており、臨床実習で学生がSVに「みられている」意識が存在しているものと思われる。

このように、臨床実習に関する学生の意識は、「患者との人間関係」を中心としてその指導形態・指導内容を求めているものの、臨床実習において「評価されている」という意識も混在し、指導する指導者側へ期待と不安を訴えているものと考え³⁾。

参考文献

- 1) 社団法人日本理学療法士協会編：臨床実習教育の手引き第3版。東京，1992。
- 2) 篠原英記他：臨床実習学生の考える臨床実習指導者の学生に対する評価—アンケート調査より—。理学療法学，1993，20：82—86。
- 3) 早川進：Supervitionを考える(1)—SupervisorとSuperviseeとの関係について—。理学療法学，1985.12：253—258。